図画工作科における基礎的な能力を培う技法の習得
—低学年の絵画表現の指導を通して—

教育実践研究科　教職実践専攻　教職実践基礎領域
白髭鮎美

Ⅰ　はじめに

私が教職大学院に進学した理由は，学部の卒業研究「学年に応じた絵画指導の在り方～『自由』と『技術指導』の調和～」をまとめたことをきっかけに，教科について「もっと学びたい」と感じたためである。美術の大学院ではなく教職大学院を志望したのは，小学校教師には，教科の専門性に加えて，「授業づくり」や「学級づくり」「学校組織の在り方」といった教職に関する総合的な能力も求められるからである。多様な学校環境に応じた総合的・実践的な「教師としての力量」を身に付けるとともに，「学校を支える一員としての心構え」も身に付けたいと考え，教職大学院に入学した。

教職大学院の２年間では，多くの学校現場で実習する機会を得た。特に，刈谷市立小垣江小学校では，「学校サポーター」や「教師力向上実習Ⅰ・Ⅱ」を通して約１年半継続して実践させていただくことができ，教師としての幅広い職務について学ぶことができた。

本報告では，教職大学院での学びの中で，特に「授業づくり」に焦点を当てる。刈谷市立小垣江小学校での「教師力向上実習Ⅰ・Ⅱ」，東浦町立片葩小学校での「教師力向上実習Ⅲ」における実践を通して，実習校での学びを省察し，図画工作科における絵画表現の指導の在り方ついて整理して報告する。

Ⅱ　実践テーマ設定の理由

１　実習校の児童の実態から

刈谷市立小垣江小学校での学校サポーターを通して，以下２点のような実態がみえた。

〈実態❶〉２年１組の児童（男子１８名，女子１３名，合計３１名）は，「図画工作科が好き」と感じている児童が非常に多く，興味・関心が高い。しかし，作品の扱いからは，興味・関心の高さとは裏腹に，自分の制作活動の過程や結果に満足できていない様に感じられる。また，作品に描かれた線が単調で興味・関心を感じながらも，どう表現してよいのか，その技法が分からない様子がある。

〈実態❷〉紙面に向かうと「どのように描けばいいかわからない」「そっくりに描きたいけどうまく描けない」とつぶやき，困っている児童がいる。

絵画表現の発達論では，第３～４学年において，主観的なものの見方から客観的なものの見方に移行する中で，自分の中に描いている作品のイメージと実際に描けた絵（表現）の違い（ギャップ）に絵を描くことに対する苦手意識が芽生えることが指摘されている。発達における質的な転換に関しては理解できる。しかし，この時期に教師からの適切な指導や助言がないと，児童は思うように描けないことから苦手意識を持ち，自信を失っていくことが考えられる。

２　今日の教育的課題から　—学力の３要素—

改正教育基本法・学校教育法では，義務教育の学力の重要な３要素として，以下のように示された[i]。

○基礎的・基本的な知識・技能の習得［習得］
○思考力・判断力・表現力等への活用［活用］
○主体的な学習意欲と学びの習慣［探究］

この３つの要素「習得－活用－探究」は，並列的な活動として個々に扱われるものではない。表現や鑑賞の活動において，発想や構想をしながら，習得し，活用し，反復し，新たな探究へ向かおうとする意欲を支える能力は，児童の活動において継ぎ目なく連鎖し一体化していくものである[ii]。

その上で，安彦忠彦の考えをもとに「習得」とは基礎的・基本的な知識・技能を身に付けることであり，「活用」とは習得した知識・技能を実際に用いて，生かすために必要な思考力・判断力・表現力・その他の能力を育むことと定義する。さらに「探究」は教科で身に付けた「習得」「活用」の力を基にして，問題（課題）を見つけ，見通しを持ち，解決していく力を目指すものとして捉える。

３　自己の教育課題から

学部１年次の講義「子どもと造形」の中で，学生を対象に「美術（絵を描くこと）が好きか，嫌いか」という質問が行われた。その結果，「どちらかといえば嫌い」「嫌い」と答える学生が数多く存在した。

同じ質問を小垣江小学校の２年１組の児童に行ったとき，ほとんどの児童は「絵を描くことが好き」と答えた。休み時間になると自由帳を開き，お絵描きをする児童の姿はよく見られる光景である。

このような児童が「絵を描くことが嫌い」とならないためには，絵画表現の発達的な節目に向かう低学年期で，表現のための基礎的な能力を身に付けることが重要となる。そして，教師には児童の発達的要求を保証し，基礎的な能力を培うために必要となる技法を習得させることが求められる。

Ⅲ　実践の方法―基本的な考え方―

1　実践のねらい

私は，児童の表現を尊重し，思いのままに自己表現できる児童を育てたいと考えている。本実践では，「絵で表す（絵画表現）」ことを通して，児童のあるがままの表現を具体化させるために不可欠となる基礎的な能力を培うために必要な技法の習得を目指していく。

2　図画工作科における基礎的な能力

図画工作科の教科目標は次のように設定されている。

> 表現及び鑑賞の活動を通して，感性を働かせながら，つくりだす喜びを味わうようにするとともに，造形的な創造活動の基礎的な能力を培い，豊かな情操を養う[iii]。

図画工作科における「基礎的な能力」とは，前にある「造形的な創造活動」を実現するために必要な能力のことである。「造形的な創造活動」とは，自分の思いを形や色などで表したり，よさや美しさを感じ取ったりするなどの活動のことである。「基礎的な能力」とは具体的に，発想や構想，創造的な技能，鑑賞などの能力である[iv]。そこで，表１のように整理した。

発想や構想を具体的に表現するためには，材料や用具を用いる方法，表現をつくり出す方法（創造的な技能）を習得させる必要がある。そうすることによって，自分の思い（発想や構想の能力）を表現でき，作品をつくるときによさや美しさなどを感じ取る（鑑賞の能力）能力へと生かすことができる。

表１　図画工作科における基礎的な能力（筆者作成）

発想や構想の能力	形や色，イメージなどを基に ・想像を膨らませる ・表したいことを考える ・計画を立てる 能力
創造的な技能	・材料や用具を用いる ・表現方法をつくりだす ことで，自分の思いを具体的に表現する能力
鑑賞の能力	・作品をつくる・みるときに働いているよさや美しさなどを感じ取る能力

本実践では，これらの能力のうち，特に「創造的な技能」に焦点を当てて実践した。材料や用具の用い方，表現をつくり出す方法（絵の描き方）を習得することで，図画工作科における「基礎的な能力」が身に付くことを目指していく。この「創造的な技能」を習得させるための手立てを，本実践では「技法の習得」として述べていくことにする。

3　図画工作科における習得

ここで，注意したいことは，知識・技能の習得だけを目的としないことである。以下のような指摘がある。

> 美術の内容は，造形美の伝達ではなく，造形美の創造そのものであり，決して技術の訓練や知識の記憶が目的ではない[v]。

美術の内容は，児童の自発的で自由な表現活動を支える要素の一つである。基礎的・基本的な知識・技能の習得は目的ではなく，児童の思いを表現するときに必要な要素であることは忘れてはならない。

表２は，本実践を行う小垣江小学校の２年１組で実践した画材における技法の「習得」「活用」をまとめたものである。学習する画材について，基礎的な能力を培う技法を全員が確実に習得すれば，活用の段階で児童の思いを表出できる。そして，児童が本実践を通して習得した技法を生かし，学年内での活用，次の学年での活用に繋がるようになることを期待して整理した。

4　「楽しく」描くことの大切さ

低学年の「発想や構想，創造的な技能などの造形的な能力を高めること」に関する目標は，次のように設定されている。

> 造形的な活動を楽しみ，豊かな発想をするなどして，体全体の感覚や技能などを働かせるようにする[vi]。

低学年の児童は，造形的な活動そのものを楽しむ傾向がある。その傾向を生かして本実践では，「楽しく」絵画表現に取り組めるような教師の手立てを提案した。低学年では「楽しく」活動に取り組むことを大切にして，結果的に基礎的な能力を培えるような授業づくりを実践していきたい。

表２　図画工作科における習得・活用

学習段階	主な学習活動		到達目標（評価基準）
習得	＜基礎的・基本的な知識・技能＞ ＜教師力向上実習Ⅰ＞ クレパスの基礎的な技法 （実践①）面塗り・混色 （実践②）混色・ぼかし 絵の具の基礎的な技法 （実践③）はじき絵 ＜教師力向上実習Ⅱ＞ コンテの基礎的な技法 （実践④）いろいろな線	１　級訓「あ・ん・こ」の顔をかこう ２　おいしいおいしいフルーツをつくろう ３　みんなのフルーツバスケットを見よう ４　えのぐであそぼう ５　カメレオンをへんしんさせよう ６　ぼく・わたしのカメレオン ７　いろいろな線をかこう ８　手をよく見てかこう ９　友達の作品を鑑賞しよう	① 画材の使い方を知り，用途に合わせて使うことができる ② 画材の技法を絵で表すことができる ③ いろいろな線の描き方を知り，絵に表すことができる
活用	＜知識・技能を用いて，生かすための思考・判断・表現力＞ コンテの技法活用 クレパスの技法活用	１０　育てている野菜をかこう １１　野菜をぬいたよ（野菜と体） １２　野菜ができた！（野菜と顔）	① 基礎的な技法を用途に応じて使うことができる（表現） ② 創造的な表現の工夫をする

Ⅳ　図画工作科の授業実践

1　教師力向上実習Ⅰでの実践

（1）テーマ

児童の豊かな表現を育む図画工作科の実践 ―第２学年 クレパスを使って―

（2）指導計画

実践①　クレパスの基礎的な技法／面塗り・混色	
第1・2時	級訓「あ・ん・こ」の顔をかこう
実践②　クレパスの基礎的な技法／混色・ぼかし	
第１時	おいしいおいしいフルーツをつくろう
第２時	みんなのフルーツバスケットを見よう(鑑賞)
実践③　絵の具の基礎的な技法／はじき絵	
第１時	えのぐであそぼう
第2・3時	カメレオンをへんしんさせよう
第４時	ぼく・わたしのカメレオン（鑑賞）

（3）指導の実際と考察

実践①　クレパスの基礎的な技法／面塗り・混色

ア．題材名

第1・2時　級訓「あ・ん・こ」の顔をかこう

イ．本時の目標（基礎的な能力の習得にむけて）

・顔を鏡で見て，手で触ることで，顔のしわや膨らみに気付き，絵に表すことができる。(発想・構想)
・顔の描き方を理解し，クレパスの技法を用いて絵に表すことができる。(技能)
・顔の線の描き方や着色の仕方のおもしろさに気付くことができる。(鑑賞)

※（発想・構想）（技能）（鑑賞）とは，図画工作科における基礎的な能力(表１)「発想や構想の能力」「創造的な技能」「鑑賞の能力」のことである。なお，本実践の主題に即して，「関心・意欲・態度」の観点については省略する。(以下同じ)

ウ．内容

４月，実習学級の教訓は「あかるいあいさつ・げんきにがんばる・こころやさしい２年１組」から「あんこ」に決定した。

ここで，級訓の掲示物づくりを計画し，実践した。級訓「あんこ」を一文字ずつ児童で分担し，学級みんなで「あ・ん・こ」と言う顔を作成した。

エ．手立て（目標達成にむけて）

① 目と手で顔の感触を確かめる活動
―視覚と触覚を働かせることによる顔の特徴の発見―
②「どこから描くか」順番を提示
―「何から描けばいいのか」理解―
③ 顔の部分ごとに区切って描く時間を設定
―「どのように描くのか」理解―

オ．成果（◇）と課題（◆）

〈手立て①について〉

◇鏡で見て，顔を触って描くこと

単に鏡を見ながら描くのではなく，顔を触って感触を確かめながら描くことで，「こんなに顔を見たことなかったな」「顔って不思議だな」と関心を高めることができた。五感の要素である，視覚〈見る〉，触覚〈触る〉を働かせることで，自分の顔の形や色を楽しみながら絵に表すことができることがわかった。(資料１)

（資料１）鏡で見て，顔を触って描く

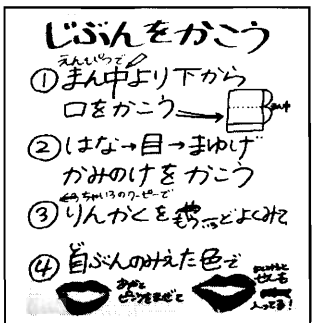
◆第２学年における「見て描く」学習の意義

実践を通して，鏡を見て顔を手で触って感触を確かめる活動には，全員が意欲的に取り組む様子が見られた。しかし，いざ絵に描くとなると「そっくりに描きたいけどうまく描けない」と手が進まない児童が１，２名いた。今回のねらいは，鏡に映る通りに描き写すことではない。第２学年では，細部まで「見て描く」ことで今まで気付かなかった線に気付く楽しさを感じさせ，概念的にでも見て触ったものを自分なりに表現できるようにすることが大切である。本時でねらいとする「楽しさを十分に感じること」を全員の児童に実感させる授業づくりが必要であると実感した。

〈手立て②･③について〉

◇線の発見

順番を示して描くことで，口・鼻・目などの顔の部分ごとに時間をかけて観察して描くことができた。児童は鏡を見て顔を触りながら,「唇には線があるよ。鼻は丸くて膨らんでいるよ。目（瞳）には黒色だけじゃないよ。(資料３）眉毛は外にむかって生えてるよ・・・」と顔の細かな特徴を捉えることができた。描く順番を示すこと，部分ごとに着目して描き方を示すことから，顔の部分に細かく着目することができること，発見した特徴を自分なりに表すことができることがわかった。



（資料２）黒板掲示

（資料３）児童の作品

実践②　クレパスの基礎的な技法／混色・ぼかし

ア．題材名

第１時　おいしいおいしいフルーツをつくろう

イ．本時の目標（基礎的な能力の習得にむけて）

・おいしいフルーツにするためには，何色で塗ればよいか考えることができる。（発想・構想）
・実践①を生かし，さらに表現を促すための技法を理解し，表すことができる。（技能）
・友達の発表を聞いて，表し方のおもしろさに気付くことができる。（鑑賞）

ウ．内容

実践①で扱った技法を生かして，フルーツバスケット（資料４）の着色を行った。おいしそうなフルーツを描くためには，何色がいいかを児童に自由に考えさせて着色した。

（資料４）フルーツバスケット

エ．手立て（目標達成にむけて）

① 題材設定の工夫
—「自分のフルーツの味」を思いのままに想像できる題材—
② 言葉による動作化
—基礎的な技法を動作化しやすくする「呪文」の工夫—
③ 段階的な作品の制作（スモールステップ）
—基礎的な技法を習得するための「小作品」，
習得した技法を生かした「本作品」の制作—

オ．成果（◇）と課題（◆）

〈手立て①について〉

◇自由な発想のおもしろさ

おいしそうなフルーツを描くために児童は，様々な味のフルーツを考えた。机間指導のときに「これは何味？」と聞くと，サイダー味のりんご，ピーチ味のパイナップル・・・児童は自由に発想し，想像力を働かせることができたことがわかった。児童にとって身近なフルーツを扱うことで，フルーツの味を思いのままに考えることができることがわかった。

〈手立て②について〉

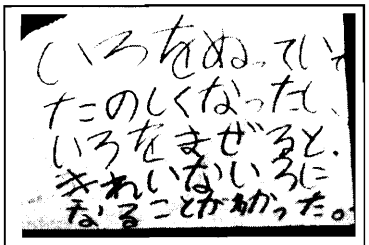
◇楽しく技法を試す—「呪文」を唱えて描くこと—

クレパスで描いた箇所を指でぐるぐると混ぜ，「おいしくな～れ」と「呪文」を唱えることで，混色の技法を楽しく確認することをねらいとした。

児童は興味を示し，「おいしくな～れ」と唱えながら描くことができた。単に「指で混ぜましょう」と伝えるよりも，楽しく技法を確認できることがわかった。

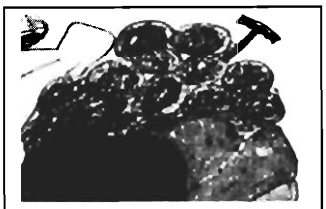
児童Ａの感想・作品に着目してみる。

感想（資料５）から，色を塗ることに楽しさを感じていたことがわかった。



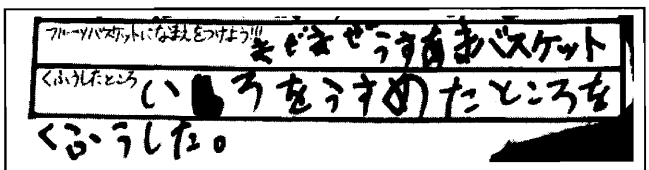
（資料５）児童Ａの感想

作品（資料６）を見ると，ぶどうは，紫・青・水色を混色し，りんごやみかんは指でぼかしている。資料５から，そうして生まれた色を「きれいな色」と感じていることがわかった。



（資料６）児童Ａの作品

また，児童Ａの作品名（資料７）から，クレパスで混色し，指でぼかして色を薄くすることで，あまい味のフルーツバスケットを作ることができたと感じていることがわかった。

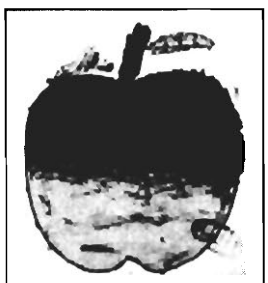


（資料７）児童Ａの作品名

〈手立て③について〉

◇段階的な作品の制作—習得から活用へ—

まずは小作品で混色を試した。はやくできた児童には「りんごに葉っぱを付ける等の工夫をしてよい」と伝えると，児童は自分なりに葉っぱを付けたり，虫を描き工夫することができた。児童Ａの小作品（資料８）には，おいしそうなりんごを狙っている虫が描かれている。また他の児童は，クレパスで濃く描いて爪でひっかくと模様を描くことができるというクレパスの特性に，自ら気付くことができていた。



（資料８）児童Ａの小作品

このような工夫を凝らしたり，技法に気が付いたりした児童の作品は，その都度取り上げて紹介した。そのため，本作品においても基礎的な技法をさらに自分なりに工夫して作品を制作できた。段階をスモールステップで設定することで，技法を試し，次の作品に生かせることがわかった。

実践③　クレパスの基礎的な技法／はじき絵

ア．題材名

第2・3時　カメレオンをへんしんさせよう

イ．本時の目標（基礎的な能力の習得にむけて）

・カメレオンの模様や背景を考えて描くことができる。（発想・構想）
・カメレオンの模様をクレパスで濃く描くことができる。（技能）
・友達の作品から模様の形や色のよさを感じ取ることができる。（鑑賞）

ウ．内容

クレパスで濃く描き，はじき絵（バチック）をつくる。ここでは，今までのクレパスの基礎的な事項（持ち方等）を確認し，濃くはっきりと模様を描かせることをねらいとした。加えて，その上から絵の具を塗ることで，描いた模様が浮き出してくる「はじき」の効果そのものの楽しさを味わうこともねらいとした。また，何色の絵の具で塗るとクレパスの線が生きるのか考えさせる発問を行った。

エ．手立て（目標達成にむけて）

① 題材設定の工夫
—「カメレオンの模様・背景」を思いのままに想像できる教材—
② 言葉による動作化
—基礎的な技法を動作化しやすくする「呪文」の工夫—
③ 段階的な作品の制作（スモールステップ）
—基礎的な技法を習得するための「小作品」，
習得した技法を生かした「本作品」の制作—

オ．成果（◇）と課題（◆）

〈手立て①について〉

◇自由な発想のおもしろさ

２年１組のカメレオンにはぐるぐる線，なみなみ線，丸，星，花など様々な模様があった。また，背景は山，海，宇宙・・・と自由に発想して表すことができた。

カメレオンを題材としたことで，児童は自由に発想し，思いのままにカメレオンを変身させることができた。そこから，この題材の有効性を確認できた。

〈手立て②について〉

◇「呪文」を唱えることによる技法の習得

今回の「呪文」は，カメレオンの模様を楽しく，濃く描くことの意識付けをねらいとしている。「ぐるぐる，ぐるぐる」と力を込めて「呪文」を唱えることで，児童に濃く描く意識を持たせることができた。また，児童は「カメレオンを変身させるぞ」と意欲を持って取り組むことができた。ここから「呪文」を唱えることによる技法の習得のための意識付け・意欲付けを確認できた。

〈手立て③について〉

◇段階的な作品の制作

小作品を制作したとき，児童は「はじき絵」の効果に驚き，楽しんで取り組むことができた。小作品では，何色のクレパスで描くと鮮やかに彩色できるか試すことができていた。

（資料９）白いクレパスで描かれた児童の小作品

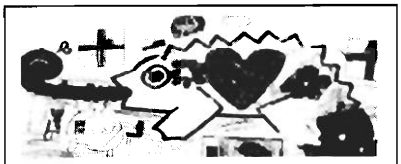
児童Ｃは，白のクレパスで描くことで，線が鮮明に表れること気付き（資料９），作品にもその技法を生かすことができていた。（資料１０）ここから，段階的な作品づくりの有効性を感じられた。

（資料１０）白を生かした作品

◆はじき絵のための基礎的な技法の習得

児童は，前時までのクレパスの基礎的な知識・技能を用いて濃く模様を描くことができていた。

しかし中には，児童Ｂ（資料１１）のように，カメレオンをクレパスでほとんど塗りつぶし，はじき絵の効果を生かせない児童も見受けられた。事前に，注意事項として「体の模様は，線で描くことではじきの効果が高まる」ことに気付かせ，実践できる事前の指示が必要であると学んだ。



（資料１１）塗りつぶされた作品

２　教師力向上実習Ⅱの実践

（１）実習のテーマ

児童の豊かな表現を育む図画工作科の実践
—第２学年 クレパスをつかって—

（２）指導計画

実践④　コンテの基礎的な技法／いろいろな線	
第１時	いろいろな線をかこう
実践⑤　コンテの基礎的な技法／技法のまとめ	
第1・2時	手をよく見てかこう
第３時	友達の作品を鑑賞しよう

（３）指導の実際と考察

実践④　コンテの基礎的な技法／いろいろな線
実践⑤　コンテの基礎的な技法／技法のまとめ

ア．題材名

第１時	いろいろな線をかこう
第2・3時	手をよく見てかこう

イ．本時の目標（基礎的な能力の習得にむけて）

第１時	・いろいろな線の違いを考えながら絵に表すことができる。（発想・構想） ・いろいろな線の描き方を理解し，絵に表すことができる。（技能）
第２・３時	・いろいろな線を描いたり，面をぼかしたり，消しゴムで消したりして自分なりに工夫を考え，描くことができる。（発想・構想） ・いろいろな線の描き方を使って，絵に表すことができる。（技能） ・友達の作品に表れている線や面の表し方のよさに気付き，味わうことができる。（鑑賞）

ウ．内容

第１時「いろいろな線をかこう」では，細い・太い線，薄い・濃い線，点線，波線，ギザギザ線など，線の描き方を知り，心を込めて（ゆっくりとていねいに）描かせた。第２・３時「手をかこう」では，導入として今までに習得した技法を確認して生かせるようにした。

ここでは，第１時の実践を中心に述べる。第２・３時に３つの手立てを用いて，手の線や面を工夫して表せたかを考察していく。

エ．手立て（目標達成にむけて）

① コンテの基礎的な技法の理解
—いろいろな線の描き方の理解—

②「心を込めた線」の定義付け・提示
—「ゆっくりとていねいな線」を描く大切さの実感—

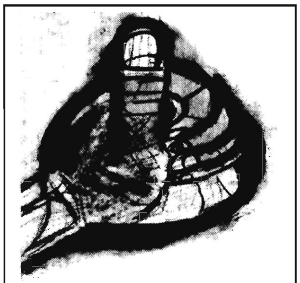
③ 画面いっぱいにのびのび描く工夫
—画面いっぱいの思い切った表現—

オ．成果（◇）と課題（◆）

〈手立て①・②・③について〉

◇３つの手立ての有効性

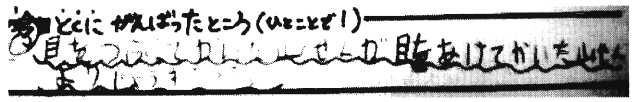
児童は，手立て①から，濃い・太い線，細い・薄い線の違いを意識して描き分けることができていた。これを生かして第２・３時では，手にあるしわの線の太さや濃淡を意識して描くことができた。（資料１２）



（資料１２）児童の作品

手立て②から，線を１本ずつ集中して描くことができた。また，「目を閉じて線を描く」ことで，「心を込めた線」をさらに意識して描くことができた。

（資料１３）左：「目を開けて」，右：「目を閉じて」描いた線



（資料１４）児童の一言感想

目をつぶってかいた山せんが目をあけてかいた山せんよりじょうずだった

資料１３の線を見ると，ある児童は目を閉じて描いた方がゆっくり，ていねいに線を引くことができていることがわかる。この児童の感想（資料１４）には，この成果に児童自身が驚いている様子が伺える。ここから，「目を閉じて描く」ことによって，「心を込めた線」をさらに意識させることができることがわかった。

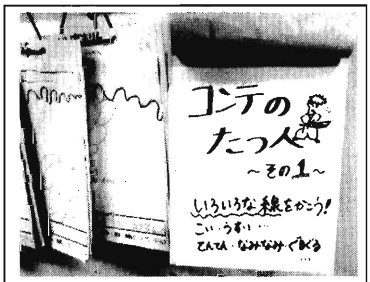
手立て③から，描くペースによって進行具合は異なるが，早く描けた児童の作品を見ると，児童が「画用紙の中に線を収めよう」と意識せずに描くことができたことがわかった。以上から，実践した３つの手立ては有効であったと言える。

〈その他—基礎的な技法の確実な習得を目指して—〉

◇作品掲示の工夫

—継続的・系統的な基礎的な技法の習得にむけて

習得した技法をまとめていくために，掲示ボードを作成した。（資料１５）



（資料１５）技法の掲示ボード

この掲示ボードの作成は，実習期間でしかできなかった。しかし，４月から継続して掲示すれば，技法の復習や１年間を通して何を学んだかを振り返ることができると感じた。今後は様々な画材で技法を試していくなど，現場でも生かせるようにしたい。

◇活動後の「一言感想」の意義

—児童の振り返りの生かし方—

活動後に一言感想を書かせた。これによって，児童が授業中に感じたことや考えたことなど，授業中に読み取れない児童の思いや作品に対する意欲を把握することができた。今後は，授業後の感想には「何を」「どのように」書かせるのかについて教師が明確な意図を持ち，授業中に見ることのできなかった児童の実態把握に生かしたい。

3　教師力向上実習Ⅲの実践

実習Ⅲでは，東浦町立片葩小学校の図画工作科の授業の実際・児童の実態に応じて，クレパス・絵の具の基礎的な技法の習得を目指して計画した。

（１）実習のテーマ

児童の豊かな表現を育む図画工作科の実践 ―第１学年 絵の具による色づくり―

（２）指導計画

実践⑥	**クレパスの基礎的な技法／面塗り・混色**
第１時	笑っている顔をかこう
実践⑦	**絵の具の基礎的な技法／彩色**
第2・3時	ぴったりカラーで色をぬろう（制作・鑑賞）

（３）指導の実際

実践⑥　クレパスの基礎的な技法／面塗り・混色

ア．題材名

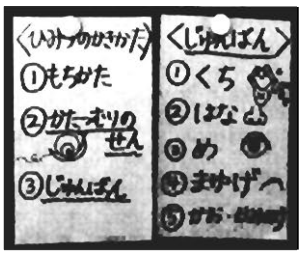
第１時　笑っている顔をかこう

イ．本時の目標（基礎的な能力の習得にむけて）

・顔を鏡で見て，手で触ることで，顔のしわや膨らみに気付き，絵に表そうとする。（発想・構想）
・クレパスの使い方を理解して自分の顔を描くことができる。（技能）
・発表を通して，自分や友達の作品のよさに気付くことができる。（鑑賞）

ウ．内容

本実践は，実践①「顔をかこう」の実践内容を生かせるようにした。



（資料１６）基礎的な技法

第１学年の絵画表現の指導において大切にしたいことは，第２学年と比較してより具体的に，楽しい授業展開を行うことである。本実践でも，実践①と同様に視覚・触覚を働かせて「楽しく」描けるようにした。また，基礎的な技法を具体的に理解できるように，絵の描き方を３点で示した。（資料１６）

加えて，本実践では，さらに基礎的な技法を全員が理解し，習得できるように以下の手立てを実践した。

エ．手立て（基礎的な能力の習得にむけて）

① 目と手で顔の感触を確かめる活動
―視覚・触覚を働かせて，顔の特徴を発見―

②「どこから描くか」目安を設定
―描き始めの不安の解消―

③ 教師の下描きによる方向付け
―「描き方がわからない」児童の課題解決を目指した指導―

オ．成果（◇）と課題（◆）

〈手立て①について〉

◇ 鏡を見て，顔を触って「笑顔」を描くこと

（資料１７）
歯の形を細部まで観察

実践①をもとに，本実践では「笑顔」を描かせた。笑顔と無表情を鏡で見比べることで，目の形や顔のしわに違いがあることに気付き，手で触って確認できるようにした。「笑ったらぎざぎざしてる前の歯が見えたよ」とつぶやいた児童Ｄの作品には，歯の形を細部まで観察し，絵に表すことができた。鏡でじっくり見て，顔を触って描くことで，意欲的に細部まで観察できることがわかった。（資料１７）

〈手立て②について〉

◇描き始めの点を示したこと―目安の設定―

（資料１８）描き始めの目安

実習Ｉで，顔のどこの部分から描くのかを示したとき，中には自信がなくて描き始められない児童がいた。そこで，本実践では，始めに描く「口」の中心となる位置に，目安として錐で穴をあけた。（資料１８）児童は，その穴を参考にして，描き始めることができていた。

中には，「目安がだいたい中心にくるように」口を描くことに難しさを感じている児童もいた。その児童の多くは，穴をあけた部分を描き始めとして捉えていることが多かった。目安とする点は，「描き始めの点」でなく，「中心」であると捉えさせるように，今後はわかりやすい説明方法を考えていきたい。

〈手立て③について〉

◆教師による下描き

ある児童は，鏡を見て線を発見することへの関心は高いが，それを絵で表すことに苦手意識を持ち，顔の部分ごとに手が止まり，なかなか描くことができなかった。そこで，児童に「鼻は画用紙のどのへんにくるかな」と問い，画用紙に指さしをさせた。その位置を教師が鉛筆で下描きし，鉛筆の上からクレパスで描くように伝えた。それによって，児童は描き始めることができたため，「描けた」という満足感を得られたと考えられる。しかし，それがこの児童にとって「楽しい」活動であったのかが課題となる。今後は児童の発達段階に応じた適切な技法の指導について検討したい。

実践⑦　絵の具の基礎的な技法／彩色

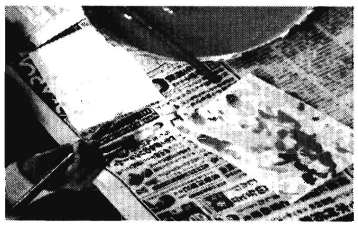
ア．題材名

第2・3時　ぴったりカラーで色をぬろう（制作・鑑賞）

イ．本時の目標（基礎的な能力の習得にむけて）

・色彩のイメージを感じ，自分に合った色を見つけ，その理由を考えることができる。（発想・構想）
・点描の仕方を思い出し，ていねいに筆を動かして表現することができる。（技能）
・発表を通して，自分や友達の作品のよさに気付くことができる。（鑑賞）

ウ．内容―点描的な活動―



（資料19）右：3枚目，左：1枚目の小作品

本時では，実習Ⅲに観察した「点描でバックをぬろう」をもとに，実践⑥で描いた自分の顔の背景を絵の具で彩色する活動を計画した。

本時では，自分に合った色彩を一人一人の思いのままに選択し，「点描的な活動」を通して彩色できるようにした。ここで「点描的な活動」を行う目的は，点描的な手法を用いて「色をていねいに置く」ことである。また，授業観察を通して，点描的な活動では点を明確に表すことのできる筆づかいが大切であると学んだ。

観察した授業では，本番とする作品を描く前に，小さな画用紙に練習を行ってから本番の作品の彩色に入っていた。（小作品の制作）

観察する中で１時間のうちに２～３枚の練習した結果，大きな上達がみられた児童がいた。（資料１９）

右側の図の３枚目の小作品の制作では，色を塗り込むのではなく，点として色を置くことができている。ここで，もう一段階実践することで児童の作品のさらなる成長が見られるのではないかと思い，本実践を行うことにした。

エ．手立て

① 色の印象を想像する場面の設定（発想・構想）
―色彩感覚の獲得―

② ワークシートの活用（発想・構想）
―点描で「自分らしさ」を表現―

③ 言葉による動作化（技能）
―基礎的な技法を動作化しやすくする「呪文」の工夫―

オ．成果（◇）と課題（◆）

〈手立て①について〉

◆色の印象を想像しやすい工夫

本時では，まず色から連想するものを発表し，そこから色の印象を考えた。児童は，「青は海」「紫はぶどう」など，身近なものから色の連想をすることはできたが，色の印象を発表するのは困難な様子であった。

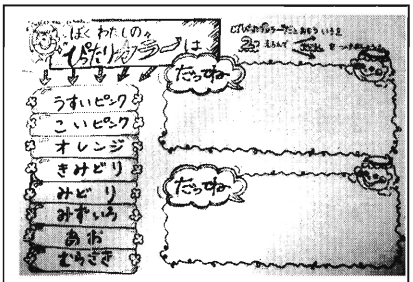
これは，「色の印象」は具体性がなく答えにくいことから，色の印象よりも身近なものから色を連想する方が容易であるためだろうと考えた。ここから，「色の印象を想像する」ためには，その色から連想されるものを想像することで，色に対する印象を養うことが大切であると感じた。今後は，理由を持って色を選べるような色彩感覚を高める授業設定が必要となる。

〈手立て②について〉

◇ワークシートの活用―自分の思いを明確に―

本時では，児童が自分に合う色（ぴったりカラー）を２色選び，点描で彩色した。ここで，ワークシートを使って，自分がその色を選んだ理由を考えた。

ワークシートには「ぼく・私のぴったりカラーは○○。だってね・・」と発表の型を示し，全員が自分の思いを発表できるようにした。（資料２０）



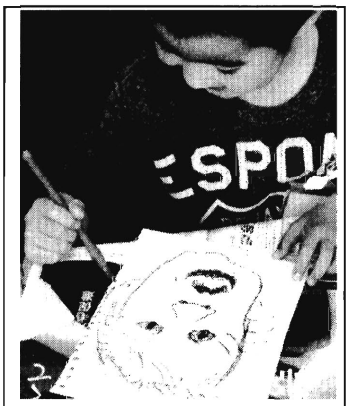
（資料２０）ワークシート

児童はワークシートによって，「なぜこの色を選んだのか」その理由を考え，発表することができた。ここから，自分の思いを整理し，自分らしさ（自分でよいと思う色を選ぶこと）に気付くために，ワークシートを用いたことは有効であると感じた。

〈手立て③について〉

◇「呪文」による技法の動作化

第１時の点描の方法を確認するとき，「点描天使・てんちゃんの秘密の呪文を教えるよ」と声かけし，「てんちゃん，てんちゃん」とリズムよく声に出しながら点描することで筆をゆっくりと丁寧に動かすことができることを伝えた。ここから，リズムを持ち，ひと筆ずつ意識して筆を運ぶことができた。低学年では，「呪文」を用いることによって，動作の方法を具体的に理解し，絵画表現に生かすことができることがわかった。（資料２１）



（資料２１）技法の動作化

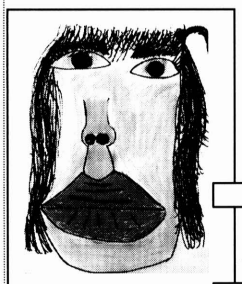
4　本実践のまとめ

（1）基礎的な能力を培う技法の習得を目指して
—児童の作品の変容—

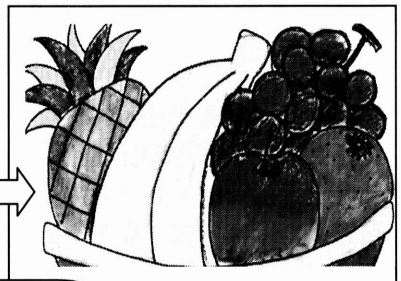
本実践において特に実習Ⅰ・Ⅱでは，継続的に児童と関わることができ，絵に表れた変化をみることができた。ここでは，特に基礎的な能力の変容が見られた児童の作品に着目し，小垣江小学校での実践①「顔を描く」と実践④「手を描く」の活動を比較した。

ア．〈児童Ａ〉基礎的な技法の習得：混色・ぼかし

実践①では，唇を大きく捉えて描いているが，全体的に絵に動きがなく，線は単調で変化がない。着色はべた塗りで，混色を用いていない。（資料２２）

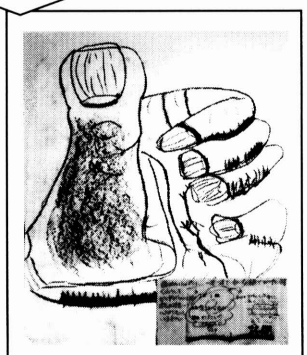


（資料２２）
実習Ⅰ４月



（資料２３）
実習Ⅰ６月

しかし，実践②では，りんご・ぶどう・パイナップルで混色が見られる。一つ一つていねいに着色し，よく見ると指でぼかし，クレパスの技法を試していることがわかる。（資料２３）

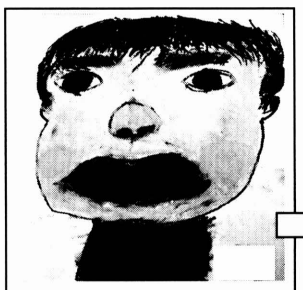


（資料２４）実習Ⅱ９月

また，実践④でも手にあるしわや影を面塗りし，さらにぼかしている。また，バランスもよくなった。ここから，児童Ａは画材の基礎的な技法を習得し，絵に表すことができたと言える。（資料２４）

イ．〈児童Ｂ〉基礎的な技法の習得：いろいろな線

実践①では，顔と首の色の違いに気付き色を塗り分けていた。しかし，顔の線は単調で変化はない。また，顔の表情に動きが見られない（資料２５）



（資料２５）実習Ⅰ４月

（資料２６）実習Ⅱ９月

実践④では，親指から手のひらにかけて濃い・薄いしわをたくさん発見し，線描きで表すことができている。手のひらの周辺が黒く描かれているのは，児童が影を意識して描いたためである（つぶやきから）。４本の指は少し小さくなったが，それでも指のしわまで描こうという児童の思いが感じられる。（資料２６）

資料２７をみると，実践①では顔の表情に動きが見られなかったが，動きが出て，生き生きと表現されている。また，顔にある濃い・薄いしわに気付き，表すことができている。児童Ｂの作品の変化からも，児童の基礎的な能力が培われたと言える。

（資料２７）学校サポーター１月

（2）本実践で明らかになったこと

児童が基礎的な技法を習得し，思いのままに表現するためには，以下の手立てが有効であったと言える。

◇題材の設定の工夫—思いのままに想像し楽しむ—

本実践では，「フルーツバスケット」や「カメレオン」を題材として用いた。これによって児童は興味・関心を高め，自分の思いのままに想像し，絵に表すことができていた。個々が豊かに発想・構想できる題材を用いれば，想像的な技能を働かせてより豊かに表現することができることがわかった。

◇言葉による動作化

本実践では，「呪文」を唱えることで技法を試した。擬音語や繰り返しの言葉でわかりやすく，「具体的な言葉（＝呪文）」を用いることで，児童は基礎的な技法を理解し，生かすことができることがわかった。今後も，発達段階に合わせた言葉による動作化を図り，児童が基礎的な能力を培い，高められるようにしたい。

◇段階的な作品の制作（スモールステップ）

本実践では，本番の作品（本作品）に入る前に練習として小さな画用紙（小作品）で技法を試した。小作品では画材の特性を知り，楽しみ，本作品で生かすことができた。段階的に作品を制作することで，児童は「どのように描けばいいか」技法を理解し，自信を持って描くことができることがわかった。

5　まとめ

本実践を通して，画材（クレパスやコンテ）の基礎的な技法を習得し，生かすことができれば，自分の思いを表現して活用できるという基礎的な能力を培うことができると確信した。これからも，児童の豊かな感性を大切にして，表現できる指導を実践したい。

Ⅵ　おわりに　―目指す教師像―

本稿では，図画工作科における実践を中心に報告した。教職大学院では，「授業づくり」や「学級づくり」「学校の在り方」など幅広い理論と，現場における実践を学ぶことができた。教職大学院での学びを生かして，以下のような教師になりたい。

1　授業づくり

○確かな学力を身に付けさせる授業実践

授業づくりを行うにあたって，その授業でどのような力を身に付けさせたいのかを明確にすることが大切であると学んだ。授業を通して基礎的・基本的な知識・技能を身に付けることに加えて，「わかった！」という満足感や自信から，学ぶことに喜びを感じ，「もっと知りたい！」という意欲に繋がること，「できた！」という達成感から自己の有用感や自信を持ち，「もっとできるようになりたい」という意欲に繋がるような楽しく，確かな学力の身に付く授業づくりを実践していきたい。

○図画工作科を通して―豊かな心の育成―

私は図工が好きである。小学校６年生のとき，担任の先生が，私が描いた絵をたくさん褒めてくれたことを今でも覚えている。図工では，自分の思い（感性）のままに表すことができるが，教師の指導によって発想や構想が制限されたり，否定されたりしかねない。私は子どもたちの主体的な表現の豊かさを尊重し，さらに技術が高まる適切な指導のできる教師になりたい。そして，図工を通して培った能力が「生きる力」へと発展できるような授業を展開していきたい。

2　学級づくり

○児童のよさの発見―認めて，褒める―

学級の中には様々な児童がいて，毎日違った事件が起こる。教師は「今何を教えないといけないのか」を即座に判断し，伝えていくことが大切であると学んだ。注意すべきこと，今頑張って欲しいことは児童が自覚できるまで長期的に，妥協せずに繰り返し伝えたい。その中でも児童の成長を見つめてよいところを発見し，一人一人を認めて，褒めていきたい。

3　教師としての姿勢

○謙虚に，学び続ける気持ちを忘れない

実践を行うためには，その基盤となる知識や技術，応用力が必要となる。教師は，常に成長し続ける児童を育成する存在である。私自身も向上心を持って，常に謙虚な姿勢で，成長し続ける教師でありたい。

【付　記】

教職大学院での２年間の実習は，以下の学校で実践させて頂いた。

学校サポーター，教師力向上実習Ⅰ・Ⅱ

刈谷市立小垣江小学校（大谷悟校長先生，教務主任石部由貴子先生，長谷川千津先生）

特別課題実習

豊田市立東保見小学校（新美隆一校長先生）

教師力向上実習Ⅲ

東浦町立片葩小学校（鈴村俊二校長先生，八釼明美先生，水野真希子先生）

実習校では多くの先生方にお忙しい中，温かいご指導・ご助言をいただき，大変お世話になりました。お世話になりました全ての方々に心から感謝申し上げます。

最後になりましたが，学校サポーターでは，山田久義先生，教師力向上実習Ⅰでは神谷孝男先生，教師力向上実習Ⅰ・Ⅱでは中妻雅彦先生，教師力向上実習Ⅲでは恒川武久先生，図画工作科の授業づくりでは，竹井史先生にご指導・ご助言をいただき，大変お世話になりました。本当にありがとうございました。

【主な参考文献】

1　学習指導要領関係

・『小学校学習指導要領』（文部科学省，2008）
・『小学校学習指導要領総則』（文部科学省，2008）

2　図画工作科に関わる文献

・佐々有生『図画工作・美術科教育の理論と実践』（現代教育社，2000）
・佐々木宰，新井義史，福田隆眞『小学校図画工作科教育の基礎　図画工作のエッセンス』（三晃書房，2002）
・金子一夫『美術科教育の方法論と歴史〔新訂増補〕』，（中央公論美術出版，2003）
・東山明『美術教育の基軸と課題』（明治図書，1998）
・宮脇理『小学校図画工作科指導の研究』（建帛社，2000）

---

i　学校教育法（『教育小六法』学陽書房，2009）
ii　藤江充，辻政博『小学校新学習指導要領　ポイントと授業づくり　図画工作』（東洋館出版社，2008）
iii　『小学校学習指導要領解説図画工作編』（文部科学省，2008）
iv　藤江充・三澤一実編著『小学校学習指導要領の解説と展開　図画工作科編』（教育出版，2008）
v　大橋功監修『美術教育概論』（日本文教出版，2009）
vi　iiiに同じ